

# 狼森と笊森、盗森

宮沢賢治

青空文庫



小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼オイノもり森で、その次が笹ざ森もり、次は黒坂森、北のはずれは盗ぬす森もりです。

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体きたいな名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知っているものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨おおきな巖いわが、ある日、威張いばつてこのおはなしをわたくしに聞かせました。

ずうつと昔むかし、岩手山が、何べんも噴火ふんかしました。その灰でそこらはすっかり埋まりました。このまつ黒な巨きな巖も、やつぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのだそうです。

噴火がやつとしずまると、野原や丘おかには、穂ほのある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、とうとうそこらいつぱいになり、それから柏かしわや松まつも生え出し、しまいに、いまの四よつの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思っただけでした。するとある年の秋、水のようにつめたいすきとおる風が、柏かしわの枯れ葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠かんむりには、雲の影かげがくつきり黒くうつつていて日でした。

四人の、けらを着た百姓たちが、山刀や三本鍬や唐鍬や、すべて山と野原の武器を堅くからだにしぼりつけて、東の稜ばった燧石の山を越えて、のっしのっしと、この森にかこまれた小さな野原にやって来ました。よくみるとみんな大きな刀もさしていたのです。

先頭の百姓が、そこらの幻燈のようなけしきを、みんなにあちこち指さして

「どうだ。いいとこだらう。畑はすぐ起せるし、森は近いし、きれいな水もながれている。それに日あたりもいい。どうだ、俺はもう早くから、ここに決めて置いたんだ。」と云いますと、一人の百姓は、

「しかし地味はどうかな。」と言いながら、屈んで一本のすすきを引き抜いて、その根から土を掌にふるい落して、しばらく指でこねたり、ちよつと嘗めてみたりしてから云いました。

「うん。地味もひどくよくはないが、またひどく悪くもないな。」

「さあ、それではいよいよここときめるか。」

も一人が、なつかしそうにあたりを見まわしながら云いました。

「よし、そう決めよう。」いままでだまって立っていた、四人目の百姓が云いました。

四人はそこでよろこんで、せなかの荷物をどしんとおろして、それから来た方へ向いて、高く叫びました。

「おおい、おおい。ここだぞ。早く来お。早く来お。」

すると向うのすすきの中から、荷物をたくさんしよって、顔をまっかにおかみさんたちが三人出て来ました。見ると、五つ六つより下の子供が九人、わいわい云いながら走ってついて来るのでした。

そこで四人の男たちは、てんでにすきな方へ向いて、声を揃えて叫びました。

「ここへ畑起してもいいかあ。」

「いいぞお。」森が「一斉にこたえました。」

みんなは又叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた声をそろえてたずねました。

「ここで火たいてもいいかあ。」

「いいぞお。」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木貰<sup>きしもら</sup>つてもいいかあ。」

「ようし。」森は一斉にこたえました。

男たちはよろこんで手をたたき、さつきから顔色を変えて、しんとして居た女や子どもらは、にわかにはしやぎだして、子供らはうれしまぎれに喧嘩<sup>けんか</sup>をしたり、女たちはその子をほかほか撲<sup>なぐ</sup>つたりしました。

その日、晩方までには、もう萱<sup>かや</sup>をかぶせた小さな丸太の小屋が出来ていました。子供たちは、よろこんでそのまわりを飛んだりはねたりしました。次の日から、森はその人たちのきちがいのようなになって、働らいているのを見ました。男はみんな鍬をピカリピカリさせて、野原の草を起しました。女たちは、まだ栗鼠<sup>りす</sup>や野鼠<sup>のねずみ</sup>に持って行かれない栗<sup>くり</sup>の実を集めたり、松を伐<sup>き</sup>つて薪<sup>たきぎ</sup>をつくつたりしました。そしてまもなく、いちめんの雪が来たのです。

その人たちのために、森は冬のあいだ、一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>、北からの風を防いでやりました。それでも、小さな子どもらは寒がつて、赤くはれた小さな手を、自分の咽喉<sup>のど</sup>にあてながら、「冷たい、冷たい。」と云つてよく泣きました。

春になって、小屋が二つになりました。

そして蕎麦そばと稗ひえとが播まかれたようでした。そばには白い花が咲き、稗は黒い穂を出しました。その年の秋、穀物がとにかくみのり、新しい畑がふえ、小屋が三みつつになったとき、みんなはあまり嬉うれしくて大人までがはね歩きました。ところが、土の堅く凍こおった朝でした。九人のこどもらのなかの、小さな四人がどうしたのか夜の間に見えなくなっていたのです。みんなはまるで、気違きちがいのようになって、その辺をあちこちさがしましたが、こどもらの影かげも見えませんでした。

そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一いっしょ緒に叫びました。

「たれか童わらしやど知らないか。」

「知らない」と森は一斉にこたえました。

「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。

「来お。」と森は一斉にこたえました。

そこでみんなは色々の農具をもつて、まず一番ちかい狼オイノモリ森に行きました。森へ入りますと、すぐしめつたつめたい風と朽葉くちばの匂においとが、すつとみんなを襲おそいました。みんなはどンドン踏ふみこんで行きました。

すると森の奥おくの方で何かパチパチ音がしました。

急いでそっちへ行つて見ますと、すきとおったばら色の火がどんどん燃えていて、狼オイノが九足くひき、くるくるくるくる、火のまわりを踊おどつてかけ歩いているのでした。

だんだん近くへ行つて見ると居なくなつた子供らは四人共、その火に向いて焼いた栗はつたけや初茸はつたけなどをたべていました。

狼はみんな歌を歌つて、夏のまわり燈籠とうろうのように、火のまわりを走っていました。

「狼森のまんなかで、

火はどろどろぱちぱち

火はどろどろぱちぱち、

栗はころころぱちぱち、

栗はころころぱちぱち。」

みんなはそこで、声をそろえて叫びました。

「狼どの狼どの、童わらわしやど返して呉けろ。」

狼はみんなびっくりして、一ぺんに歌をやめてくちをまげて、みんなの方をふり向きましました。



すると火が急に消えて、そこらにはわかにかに青くしいんとなつてしまつたので火のそばのこどもらはわあと泣き出しました。

狼は、どうしたらいいか困つたというようにしばらくきよろきよろしていましたが、とうとうみんないちどに森のもつと奥の方へ逃げて行きました。

そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出ようとなりました。すると森の奥の方で狼どもが、

「悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはうちに帰つてから栗餅をこしらえてお礼に狼森へ置いて来ました。

春になりました。そして子供が十一人になりました。馬が二疋来ました。畠には、草や腐つた木の葉が、馬の肥と一緒に入りまゝだったので、粟や稗はまっさおに延びました。

そして実もよくとれたのです。秋の末のみんなのよろこびようといつたらありませんでした。

ところが、ある霜柱のたつたつめたい朝でした。

みんなは、今年も野原を起して、畠をひろげていましたので、その朝も仕事に出ようとして農具をさがしますと、どこの家にも山刀も三本鍬も唐鍬も一つありませんでし

た。

みんなは一生懸命そこらをさがしましたが、どうしても見附かりませんでした。それで仕方なく、めいめいすきな方へ向いて、いっしょにたかく叫びました。

「おらの道具知らないかあ。」

「知らないぞお。」と森は一ぺんにこたえました。

「さがしに行くぞお。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一斉に答えました。

みんなは、こんどはなんにももたないで、そろそろ森の方へ行きました。はじめはまず一番近い狼オイノもり森オイノもりに行きました。

すると、すぐ狼オイノもりが九疋出でて来て、みんなまじめな顔をして、手をせわしくふって云いました。

「無い、無い、決して無い、無い。外ほかをさがして無かったら、もう一ぺんおいで。」

みんなは、尤もつともだと思つて、それから西の方の笹ささ森もりに行きました。そしてだんだん森の奥へ入つて行きますと、一本の古い柏かしわの木の下に、木の枝えだであんだ大きな笹ささが伏ふせてありました。

「こいつはどうもあやしいぞ。笹森の笹はもつともだが、中には何があるかわからない。一つあけて見よう。」と云いながらそれをあけて見ますと、中には無くなった農具が九つとも、ちゃんとはいっていました。

それどころではなく、まんなかには、黄金色の目をした、顔のまっかな山男が、あぐらをかいて座すわっていました。そしてみんなを見ると、大きな口をあけてバアと云いました。

子供らは叫んで逃げ出そうとしましたが、大人はびくともしないで、声をそろえて云いました。

「山男、これからいたずら止めて呉やろよ。くれぐれ頼たのむぞ、これからいたずら止めで呉ろよ。」

山男は、大へん恐きよう縮しゆくしたように、頭をかいて立って居おりました。みんなはてんでに自分の農具を取って、森を出て行こうとしました。

すると森の中で、さつきの山男が、

「おらさも粟餅持って来て呉ろよ。」と叫んでくるりと向うを向いて、手で頭をかくして、森のもつと奥へ走って行きました。

みんなはあつはあつはと笑って、うちへ帰りました。そして又また粟餅をこしらえて、狼森

と策森に持つて行つて置いてきました。

次の年の夏になりました。平らな処ところはもうみんな畑です。うちには木小屋がついたり、大きな納屋なやが出来たりしました。

それから馬も三疋になりました。その秋のとりいれのみんなの悦よろこびは、とても大へんなものでした。

今年こそは、どんな大きな粟餅をこさえても、大丈夫だいじょうぶだとおもつたのです。

そこで、やつぱり不思議なことが起りました。

ある霜の一面に置いた朝納屋のなかの粟が、みんな無くなつていました。みんなはまるで気が気でなく、一生けん命、その辺をかけまわりましたが、どこにも粟は、一ひとつぶ粒もこぼれていませんでした。

みんなはがっかりして、てんでにすきな方へ向いて叫さけびました。

「おらの粟知らないかあ。」

「知らないぞお。」森は一ぺんにこたえました。

「さがしに行くぞ。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一いっせい斉にこたえました。

みんなは、てんでにすきなえ物を持って、まず手近の狼オイノ森もりに行きました。

「狼共は九疋共もう出て待っていました。そしてみんなを見て、フツと笑って云いました。『今日も栗餅だ。ここには栗なんか無い、無い、決して無い。ほかをさがしてもなかったらまたここへおいで。』」

みんなはもつともと思つて、そこを引きあげて、今度は笹森へ行きました。

すると赤つらの山男は、もう森の入口に出ている、にやにや笑つて云いました。

「あわもちだ。あわもちだ。おらはなつても取らないよ。栗をさがすなら、もつと北に行つて見たらよかべ。」

そこでみんなは、もつともだと思つて、こんどは北の黒坂森、すなわちこのはなしを私に聞かせた森の、入口に来て云いました。

「栗を返して呉けろ。栗を返して呉けろ。」

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたえました。

「おれはあけ方、まつ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た。もう少し北の方へ行つて見ろ。」そして栗餅のことなどは、一言も云わなかったそうです。そして全くその通りだったろうと私も思います。なぜなら、この森が私へこの話をしたあとで、私は財布さいふ

からありつきりの銅貨を七錢しちせん出して、お札にやったのでしたが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしていますから。

さてみんなは黒坂森の云うことが尤もつともだと思つて、もう少し北へ行きました。

それこそは、松のまつ黒な盗ぬすともり森もりでした。ですからみんなも、

「名からしてぬすと臭くさい。」と云いながら、森へ入つて行つて、「さあ粟返せ。粟返せ。」とどなりました。

すると森の奥から、まっくろな手の長い大きな大きな男が出て来て、まるでさけるような声で云いました。

「何だと。おれをぬすとだと。そう云うやつは、みんなたたき潰つぶしてやるぞ。ぜんたい何の証しょうこ拠こがあるんだ。」

「証人がある。証人がある。」とみんなはこたえました。

「誰たれだ。畜ちく生しょう、そんなこと云うやつは誰だ。」と盗森は咆ほえました。

「黒坂森だ。」と、みんなも負けずに叫びました。

「あいつの云うことはてんであてにならない。ならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生。」と盗森はどなりました。

みんなもつともだと思つたり、恐ろしくなつたりしてお互に顔を見合せて逃げ出そうとしました。

すると俄に頭の上で、

「いやいや、それはならん。」というはつきりした厳かな声がありました。

見るとそれは、銀の冠をかぶつた岩手山でした。盗森の黒い男は、頭をかかえて地に倒れました。

岩手山はしずかに云いました。

「ぬすとはたしかに盗森に相違ない。おれはあけがた、東の空のひかりと、西の月のあかりとで、たしかにそれを見届けた。しかしみんなももう帰つてよかろう。粟はきつと返させよう。だから悪く思わんで置け。一体盗森は、じぶんで粟餅をこさえて見たくてたまらなかつたのだ。それで粟も盗んで来たのだ。はっはっは。」

そして岩手山は、またすましてそらを向きました。男はもうその辺に見えませんでした。みんなはあつけにとられてがやがや家に帰つて見ましたら、粟はちゃんと納屋に戻つていました。そこでみんなは、笑つて粟もちをこしらえて、四つの森に持つて行きました。中でもぬすと森には、いちばんたくさん持つて行きました。その代り少し砂がはいつて

いたそうですが、それはどうも仕方なかったことでしょう。

さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰いました。

しかしその栗餅も、時節がら、ずいぶん小さくなったが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまっくらな巨きな巖がおしまいに云っていました。



# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月11日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 狼森と笊森、盗森

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>